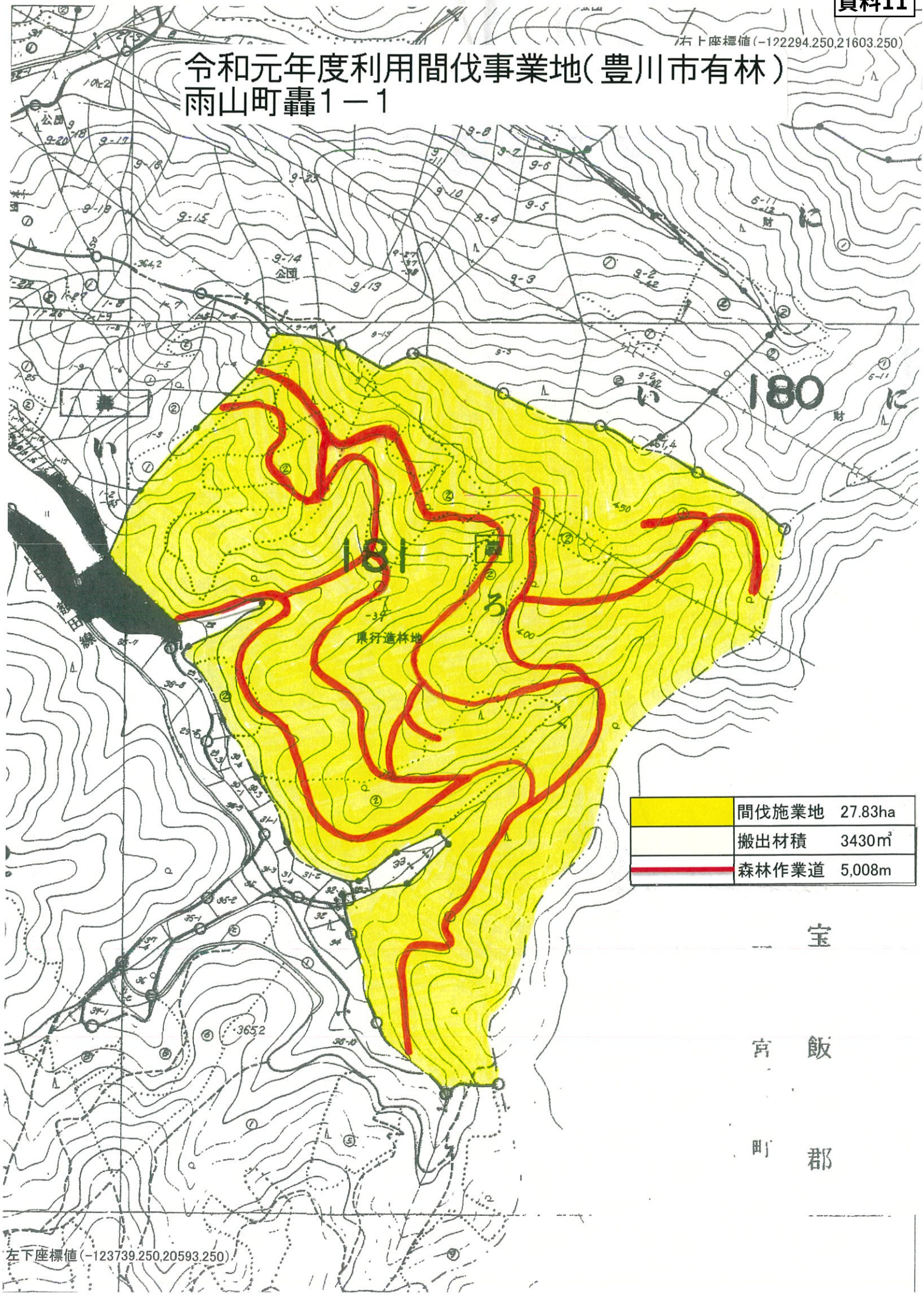
資料11

令和元年度利用間伐事業地（豊川市有林）
雨山町轟１－１



伐採（チェンソー）

集材（ウインチ付グラップル）

造材（プロセッサ）

搬出（フォワーダ）

山土場

運搬（大型トラック）

― 農中森力基金申請にあたって ―　　岡崎森林組合の歴史と当該地区について

・明治中期には当時の宮崎村村長山本源吉により、山焼の廃止と植林の推進が図られ、林業先進地となる礎が築かれた。
・岡崎森林組合は１９２１（大正１０）年に山本に賛同した７５名の組合員により組織された「河原土工森林組合」をその源ととしている。全国でも先駆けである。
・戦後の復興期・高度成長期にはこの地が村有林の恩恵に与ったことは言うまでもない。
・製材事業開始当時の森林組合は県内外からの視察者が絶えなかったと聞いている。
・岡崎市全域での人工林率は５８％であるが、旧額田町に限れば６８％、その中でも旧宮崎村である当地域に限定すれば、なんと８１％にも及んでおり、いかにこの地域が林業地であったかを物語っている。
・林研グループの活動も盛んで、昭和５０年から始まる「額田林業クラブ」は枝打ち材を中心とした高付加価値材生産に取組み、何度も全国表彰を受けるなど自伐林家の意識も高い地域であった。森林組合も事務局として少なからず歴史を共にしてきた自負がある。
・一方で明治１５０年を過ぎた今、林業の低迷と共に過疎高齢化を市内でも先端を行っているのがこの地域である。
・世代交代が進み、この地区で暮らす者或いは家族でさえ、先人祖先への感謝の心が薄れ、林業に対する意識離れに拍車がかかっている。
・山林所有者が意識を取り戻すこと、林業が再び蘇ることこそが地域活性化のカギと考える。旧宮崎村有林は現在の宮崎財産区であり、今回の申請事業地はまさに山本源吉の生家の地である。
・岡崎森林組合は都市型森林組合の典型である。岡崎市・額田町の合併後更にその色合いが濃くなった。約３０名の職員はその内７割（２３名）は市街地の住人であり、出身も３割（１０名）が県外となっている。県内の他森林組合との違いは職員構成の内訳もさることながら、近隣都市部からの仕事の注文も多い事である。
・岡崎市は旧額田町が加わったことで中核都市でありながら、役６割の森林面積を保有し、市民の水源の約半分を市内から確保できる、バランスの取れた緑豊かな市となっている。時代の変遷とともに森林組合の在り方も変わってきているが、若者が市街地から通勤できる職場としても魅力的なものとしていきたいと考えている。
・UAV の利用、ICT の林業への導入等、若者にとって林業イメージを刷新する取り組みにチャレンジしていくことは、地域のかつての繁栄を蘇らせるための起爆剤として不可欠のアイテムである。
・地元住民のみならず、広く一般市民に森林資源の活用が環境整備と地域創生の双方に理想的な形で結び付く姿を示していきたい。
・かつての林業地が新しい歴史を創り出すきっかけとなる事業にする。
・この地を森力基金の事業対象地とすることに歴史的意義を見出す。